実践報告

児童が自己を見つめ直すことのできる道徳の授業づくり

―対話的な学びに焦点を当てて―

島塚亮輔（長崎大学大学院教育学研究科）
山岸賢一郎（長崎大学大学院教育学研究科）
立岡昌文（長崎大学大学院教育学研究科）

1　はじめに

1.1　研究の背景

道徳の時間の指導の現状をめぐっては，これまでも，例えば，読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があることや，発達の段階などを十分に踏まえず，児童に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業になっている例があることなど，様々な課題が指摘され，その改善が求められてきた。

本実践研究は,平成27年3月に改正された「特別の教科　道徳(以下,道徳科。)」の目標に新たに加えられた,「自己を見つめ」という文言に着目する。「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編（以下，解説。)」では,「自己を見つめる」ことに関して,「自己を見つめるとは，自分との関わり，つまりこれまでの自分の経験やそのときの感じ方，考え方と照らし合わせながら，更に考えを深めることである。」と説明されている。

指摘されている様々な課題，改正された道徳科の目標から，道徳の授業で考える価値について，児童が自分との関わりで考える，つまり自己を見つめることのできる授業が求められていると考えた。しかも，ただ自己を見つめるだけではなく，授業を通して学んだ価値の見方をもとに，自己を見つめること，すなわち自己を見つめ直すことが必要であると考えた。

以上を踏まえ，本実践研究では，児童が自己を見つめ直すことのできる道徳の授業を構想し，実践することとする。

1.2　自己を見つめ直す

本実践研究の目的は，児童が自己を見つめ直すことのできる道徳の授業を構想し，実践することである。具体的には，授業で取り扱う価値項目について，授業を通して今までの見方とは違った新たな価値の見方について学び，それまでの自分の価値の見方をもう一度見つめ直すことができる道徳の授業を構想し，実践するというものである。

本実践研究における道徳の授業では,「新たな価値の見方」に着目したい。上地

ら（2014）は,「学習指導要領に記載されている内容項目は，どれも常識的なことがらであり，子供達がそのことについて，道徳の時間に初めて触れるということは考えにくい。したがって，道徳の時間を常識的な内容の確認の時間ではなく，常識的な内容についての『学習』の時間とするためには，授業の中でねらいとする価値について子供達が深く考えて，他者との学習を通して新たな考え方・感じ方があることを知る機会とならなければならない。」と述べている。つまり，道徳の時間を学習の時間にするためには，授業での道徳的価値について，児童が新たな考え方・感じ方があることを学ぶ必要があるということだ。新たな考え方・感じ方を学ぶということは，新たな価値の見方を学ぶことだと考えることができるだろう。

また，瀬戸（1989）は,「『道徳』の時間には，児童一人一人が，ねらいとする価値について，資料または生活経験を通して追求し，把握し，深められた各自の価値観に基づいて，今までの自分がどうであったかを『自覚』することが大切である。」と述べている。それによって，より望ましい価値を実現できる「自分」を形成していく。つまり，授業を通して新たな価値の見方を学び，それをもとに自己を見つめ直すことで，今までの自分を振り返ったり，これからの生活に生かしたりすることができ，よりよい生き方へとつながると考えた。以上が本実践研究における自己を見つめ直すことである。

1.3　対話的な学び

本実践研究は，対話的な学びに焦点を当てるものでもある。前述したように，上地ら（2014）も「常識的な内容についての『学習』の時間とするためには，[略]，他者との学習を通して新たな考え方・感じ方があることを知る機会とならなければならない。」と述べている。価値の見方は人それぞれである。価値の見方が同じ児童もいれば，異なる児童もいる。そのため，他者と意見を交わすことによって，様々な価値の見方を知ることができ，価値の見方を広げることができる。そして，新たな価値の見方に気づいたり，学んだりすることもでき，自己を見つめ直すことにもつながると考えた。そこで，本実践研究では，対話的な学びに焦点を当てることとした。

「対話的な学び」の視点について，中央教育審議会答申（2016）で,「子供同士の協働，教員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えたり，自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ，自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすることが求められる。」と述べられている。答申では，対話的な学びを人との対話だけでなく，教材との対話という視点もあると述べているのだ。しかし，本実践研究では，特に，人との対話に焦点を当てたい。また，本実践研究における対話的な学びは児童同士のペア学習やグループ学習のみを指すものではない。全体での開き合い，教師と児童の対話も対話的な学びとした。以上が，本実践研究における対話的な学びである。

1.4　実践研究の方法

（1）授業構想

本実践研究では,児童が自己を見つめ直すことのできる授業を構想するために,授業構想の視点として，価値理解，児童理解，資料分析を大切にした。それをもとに明確なねらいを設定し，発問を考え，対話的な学びの場を設定した。

（2）授業実践

本実践研究は，長崎大学大学院教育学研究科の学校教育実践実習を通じて行った。本稿が以下に取り上げる授業実践は 2017 年 10 月に行った。この授業を受けたのは，長崎市内の Y 小学校第 3・4 学年 8 名である（第 3・4 学年の 9 名の児童のうち，1 名の欠席者がいた)。資料は「二重とびチャンピオン」（文溪堂「3 年生のどうとく」）を取り扱った。内容項目は「A－5 努力と強い意志」である。

（3）授業実践の考察

授業実践の考察は主に二つの視点から行う。一つ目は，授業者による授業の実際の振り返りからである。授業者の発問や指示等でどのような反応を示したか，授業中にどのようなやり取りをしたかなどを振り返る。また，授業実践では，教室後方の定点から 1 台のビデオカメラで撮影を行っている。その授業映像も活用しつつ授業実践の考察を行う。二つ目は，児童が記入したワークシートからである。ワークシートには，発問に対する児童自身の考えを記入する欄と授業で考えたこと等を記入する感想の欄を設けた。書いてある児童の考えや感想をもとに児童が自己を見つめ直すことのできる授業になっていたかを考察していく。

2　授業構想

2.1 内容項目について

授業実践では,「二重とびチャンピオン」（文溪堂「3 年生のどうとく」）を取り扱った。内容項目は「努力と強い意志」である。「努力と強い意志」における第 3 学年及び第 4 学年の内容は,「自分でやろうと決めた目標に向かって，強い意志をもち，粘り強くやり抜くこと。」である。解説の解釈について述べる。「A－5　希望と勇気，努力と強い意志」は簡潔に言うと,「自分の目標をもって，勤勉に，くじけず努力し，自分を向上させること」に関する内容項目である。小学校段階における目指すべき最終的な姿は,「自分の目標に向かって，勇気をもって困難や失敗を乗り越え，努力することができるようにすること」であり，第 3 学年及び第 4 学年における「努力と強い意志」では，自分が立てた目標に向かってあきらめずに強い意志をもって努力することを目指すことが大切であると考えた。児童の実態としては，自分が興味・関心があることに対しては自ら目標や目標を達成できるような計画を立て，継続的に取り組む姿が見られた。しかし，辛いことや苦

しいことがあると，途中であきらめてしまう様子も見られた。このような実態を踏まえて，本授業実践では，「強い意志をもち，粘り強くやり抜くこと」を軸にして授業を構想した。

2.2　資料について

本授業実践で取り扱った資料「二重とびチャンピオン」（文溪堂「3 年生のどうとく」）について説明する。

1 年前，2 年生だった優花は，なわとび大会の二重とび競争で優勝を狙っていた。なわとびが得意な優花は，休み時間に二重とび競争をすると，1 学年上の 3 年生にも勝っていた。しかし，なわとび大会本番では，自信満々に跳び始めたものの，しばらくするとなわが足に引っかかってしまった。絶対優勝できると思っていた優花はとても悔しい思いをした。次の日から，来年のなわとび大会に向けて，二重とびの練習を始めた。1 か月くらいは毎日必ず練習していたが，なかなか記録がのびず，だんだんと練習しない日が多くなっていった。3 年生になってしばらく経ったある日，担任の山田先生から，「二重とびの練習を頑張っていますか。」と聞かれた。優花ははっとした。このとき，優花の心に，去年味わったくやしさがよみがえってきた。そして，以前のように毎日必ず二重とびの練習をするようになり，2 か月，3 か月と練習を続けていくうちに記録がのびてきた。いよいよ，なわとび大会本番を迎えた。ピストルの合図に合わせて「絶対優勝するぞ。」という気持ちでとび始めた。時間が経つにつれてとびつづける人は減っていき，ついにとんでいるのは優花一人になった。優花の優勝が決まっても，とび続けて二重とび競争の新記録まで作った。競争が終わって自分の席に戻る優花の顔は，汗にまみれながらも光り輝いていた。ここで資料は終わる。

資料の特徴としては，辛さや苦しさで一度はやめかけたことをもう一度頑張ろうとする優花の姿にある。二重とび大会優勝という目標を立て，それに向かって練習をするものの，記録は伸びずにだんだんと練習をしなくなっていく。一度はあきらめかけたが，山田先生の「二重とびの練習を頑張っていますか。」という言葉にはっとして，再び練習を毎日行うようになり，記録も伸びていく。最後はなわとび大会で優勝しただけでなく，新記録まで作った。「はっとした」とき，去年の悔しさを思い出すことで，もう一度頑張ろうという気持ちが大きくなっている。2 年生のなわとび大会の次の日もがんばろうという気持ちがあったものの，そのときよりも大きな気持ちになっている。その頑張りたい，優勝したいという優花の強い気持ち，すなわち強い意志によって努力し，記録がのび，最終的には優勝，新記録を達成した。そのような優花の姿から，「強い意志をもって，努力することの大切さ」を学んでほしいと考えた。これが，資料「二重とびチャンピオン」から児童が新たに学ぶことのできる価値の見方であると考えた。

2.3　授業展開について

以上に見た価値理解，児童理解，資料分析を踏まえて授業展開を構想した。

本授業実践で児童が新たに学ぶことのできる価値の見方を「強い意志をもって，努力することの大切さ」とした。この価値の見方は，優勝したいという気持ちの強さの変化と努力する優花の姿から学ぶことができるものだと考えた。そこで，本授業実践のねらいを「優花がはっとした場面について考えることを通して，辛さや苦しさを感じて一度はあきらめたことでも，悔しさをばねにして粘り強くやり遂げようとしている優花の姿に気づき，辛いことや苦しいことがあっても自分で決めた目標に向かって粘り強くやり抜こうとする態度を育てる。」と設定した。

本授業実践のねらいを達成し，また児童が自己を見つめ直すことのできるようにするために,「前と比べて何が違う？」という中心発問を設定した。この発問の「前」とは,「2 年生の時のなわとび大会で優勝できなかった翌日に練習を始めたとき」を指す。比べるのは,「山田先生の声かけではっとして練習を始めたとき」である。同じような気持ちである 2 つを比較して何が違うかを考えさせることで,「次こそは優勝したい。」や「負けたくない。」という「意志」は初めからもっていたものの，意志の強さが異なることに気付くことができると考えた。強い意志をもつことで，毎日の練習を 2～3 か月も続けていたこと，記録も伸びていったなど，粘り強く努力しようとする姿につながるということにも気付かせることができると考えた。ただ,「意志」という言葉を知らないと考え，優勝したい，頑張りたいなどの「～したい」ということを意志と言うことを教えることにした。また，優勝したい，頑張りたいという意志は，2 年生の時のなわとび大会翌日にも表れていると考えることができる。そこで,意志の強さを円で板書に表すことにした。これによって，山田先生の声かけではっとして練習を始めたときの方が意志は強いということが視覚的にもわかると考えた。

次いで,「前と比べて何が違う？」という中心発問に向かうための基本発問を考えた。「前」と比較させるためには「2 年生の時のなわとび大会で優勝できなかった翌日に練習を始めたとき」と「山田先生の声かけではっとして練習を始めたとき」の気持ちを考えさせる必要がある。そのため，基本発問として「(2 年生の時のなわとび大会で優勝できなかった翌日に）二重とびの練習を始めたとき，どんな気持ちだっただろう。」と「優花がはっとしたとき，何に気付いたのか。」という基本発問を設定した。また，優花がなわとび大会翌日から練習を始めたのは，自信があったなわとびで負けたからであろうが，この優花のくやしさに気付かせるために,「なわとび大会で負けたとき，優花はどんな気持ちだったと思うか。」という基本発問を設定した。そして，記録がのびず練習を段々としなくなる優花の辛さや苦しさに気付かせるために「なかなか記録がのびなかったとき，優花はどんな気持ちになったか。」という基本発問を設定した。これらの発問を設定したのは，これら 2 つの発問から,「優花が感じたような辛さや苦しさを，あなたも感じたことはないか」といった発問へと，つまり，いわば登場人物を自分自身に投影させる発問へとつなげることができる，と考えたからである。

中心発問の後の展開としては，これからの優花の姿を考えさせることで，辛いこと，苦しいことがあっても強い意志をもって頑張ろうとする優花の心構えに気付かせることができると考えた。そして，そんな優花を自分はどう思うかと問うことで，自分もそうなりたいという気持ちが強くなるのではないかと考えた。そこで,「これから優花ができないことに出会ったとき,優花はどうすると思うか。」と「そんな優花のことをどう思うか。」という発問を設定した。終末では，優花のように強い意志をもっていろいろなことを途中であきらめずに頑張ってほしい，ということを話すことにした。

導入では，今までに頑張ってできるようになったことや最近頑張ろうとしていることについて聞くことにした。児童らは本授業実践の数日前の学活の時間で，二学期に頑張りたいことについて書いた。そのため，特に，最近頑張ろうとしていることはすぐに思いつき，それが課題意識につながると考えたからだ。最近頑張ろうとしていることというのは，できないことをできるようにすることと同義である。学習課題として,「できないことをできるようになるために何が大切なのか考えよう。」と立てることにした。

3　授業の実際

本授業実践の導入では，最近頑張っていることは何かを聞いた。児童は長崎市小学校音楽会の歌の練習，体育の高跳びなど頑張っていると答えた。そこで,「できないことをできるように頑張っている？それとも，できることをもっと頑張ろうとしている？」と聞くと，一人の児童は「両方。」と答えた。次に,「今日は，できないことをできるようにするためには，ということを考えていきたいんだけど，何が大切だろう。」と聞くと，一人の児童が「頑張ること。」と答えた。一人しか答えなかったため,「今日はそのことについて考えていきましょう。」と言い，めあてを書いて，資料の読み聞かせに入った。

資料を途中まで読み終えて，資料理解に入った。優花が自信のあったなわとびで負けたことを強調し,「なわとび大会で負けたとき，優花はどんな気持ちだったと思うか。」を聞いた。児童からは,「悔しい。」や「悲しい。」という意見が出た。これ以上の意見が出なかったため，次に予定していた発問である「二重とびの練習を始めたとき，どんな思いで練習を始めたのか。」を聞いた。児童からは,「来年は絶対に優勝したい。」という意見が出た。「まだありますか。」と聞いたものの，出なかったため，次の展開に進んだ。

記録がのびずにだんだんと練習をしなくなっていった優花の気持ちについて尋ねると,「練習してもできないかも。」「練習したくない。」「どうして記録がのびないのか。」「なんで練習してものびないの。」という意見が出た。ここで,「優花の気持ちはわかる？」と聞くと,「わかる。」と答えた。そこで,「こんな気持ちになったことがある？嫌な思い出だから言いたくないかもしれないけど，もし言ってもいいよって人がいたら教えてくれませんか？」と聞いた。挙手する児童がいな

かったため，あまり思い出したくない内容であると考え，自分の経験を話した。

次いで，山田先生が優花に声をかけて，優花がはっとする場面を児童と一緒に読んだ。「はっとする。」という言葉は「何かに気づいたり，思い出したりすること。」であることを児童らと確認したうえで，「優花ははっとしたとき，何に気付いたのだろう。」と発問し，考えをワークシートに書かせた。去年の悔しさがよみがえった，毎日のように二重とびの練習をしていたことを思い出した，練習をしていなかったことを思い出したなどが挙げられた。

ここで，悔しい気持ちや悲しい気持ちなど，前に練習を始めたときと同じような気持ちがあることを示し，「何か違いそうか。」と聞くと，「違いそう。」と答えた。そこで，中心発問「前と比べて何が違うのか。」を問うた。4 人の 2 グループで話し合わせた。時間は指定せずに話し合いを始めさせた。両方のグループ（以下，グループ①，グループ②とする。）を行き来し，話し合いをしている際に沈黙が長くなったときには，少し声かけを行いながら話し合いをさせた。グループ①は意見が多く出ていたものの，グループ②は沈黙が長く続いていたため，グループ②を中心に声かけを行った。

7 分ほど経って，各グループでどんな話が出てきたのかを開き合わせた。まず，グループ②から発表させると，「絶対優勝したいという気持ちが出てきた。」という意見だった。「前はなかったのか。」と聞くと，「はい。」と答えた。他にはなかったか聞いたものの，誰も発言しなかったため，グループ①の方に聞いた。グループ①の児童は，「最初は 1 か月しか頑張れなかったけど，はっとした後は 2 か月も頑張った。」と言った。そこで，「なぜはっとした後は 2 か月も頑張れたのか。」と聞くと，別の児童が「最初は 1 か月でやめてしまったけど，もっと頑張れば記録は伸びていくと思ったから。」と答えた。他にも「最初はやろうという気持ちはあったが弱かった。でも，先生から言われた後は，やろうという気持ちが強くなったから。」と答えた児童もいた。ここで，「じゃあ，なんでこんなにも気持ちの強さが違うの。」と聞いた。ある児童が，「頑張りたいって思ったから。」と言った。「なぜ頑張りたいの？」と聞くと，「優勝したいから。」と答えた。「優勝したい，頑張りたいなど，～したいっていうのを意志と言います。」と，「意志」という言葉を教えた。ただ，「～したい」という意志は，なわとび大会翌日にも表れている。そこで，前に練習を始めたときにも意志はあったことを確認し，意志の強さを板書に円で表した。児童が言った大きさを表した。意志が強かったからこそ，以前よりも長い期間二重とびの練習をすることができた，とまとめた。

最後に説話で，「今日学んできたことは優花が『できないことをできるようになるために大切にしていること』であり，みんなのなかでも大切にしていることがあると思う。優花が大切にしていることはひとつの例だから，みんなはみんなの大切にしていることで頑張ってください。」ということを伝えた。最後に，授業の感想を書かせて終わった。

以下が，本授業実践の板書である（図 1）。

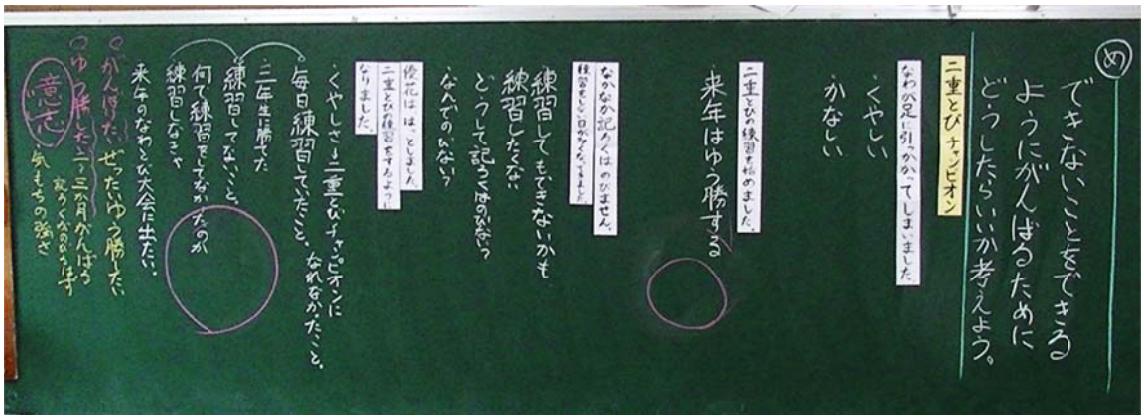

図 1　本授業実践の板書

4　考察

4.1 成果

成果として二点挙げられる。一つ目は，ねらいの達成につながる班活動としての対話活動を設定できたことである。中心発問「前と何が違うか。」に対する考えは 1 つではなく，多くの考え方がある。そこで対話活動を取り入れることによって，1 人では出なかった考えにも触れることができるだろう。もちろん，同じような考えしか出ないこともあるかもしれない。しかし，それは今まで自分だけの考えだったものが,他者と共通している考えだったということの気付きにもなる。また，結論は同じでも理由は異なるかもしれない。そして，それが新たな考えを生むことにもつながるかもしれない。多様な考えがあることに気付くことが，価値の見方も多様であると気付くきっかけになるかもしれないと考えた。本授業実践では，何について話せばよいかということをうまく伝えることができず，片方のグループは沈黙が続いていた。対話活動の設定も，ただ話させるだけでなく，話す目的をしっかりと伝える必要があることが分かった。

二つ目は，児童の価値の見方の変容をみることができた点である。児童 A は感想で,「最初は，練習をすればいいかなと思っていたけど，話を聞いたら，気持ちも大切なんだなあと思いました。」と記述している。授業前は，ただ練習をするだけでできないことができるようになる，と考えていたが，授業を受けて，気持ち，つまり意志も大切だと分かった，というのである。この児童は，新たな価値の見方をもとに自己を見つめ直していると考えられる。

4.2　課題

課題として三点挙げられる。一つ目は，児童が自分との関わりで考えたと思われる記述があまり見られなかったことである。児童 B は感想で,「できないことをできるようになるためにいし（意志）やがんばろうという気持ちをもつこと。すぐにあきらめず，さいごまでれんしゅうをするとできるということ。」と書いている。授業中に教えた意志という言葉を用いながら，粘り強く努力することが述

べられている。他の児童も，意志という言葉を使ったり，あきらめずに練習したりすることが大切だということを感想に書いていた。しかし，このように授業を通して学んだこと，わかったことは記述されているが，授業前の自分と照らし合わせて考えている記述がなかった。図 1 からもわかるように，黒板の左側（授業後半）は板書が多いが，黒板の右側（授業前半）は板書がとても少ない。つまり，授業前半の内容が薄くなってしまっていた。たしかに，中心発問の場面は板書が多くなるかもしれない。とはいえ，中心発問をより効果的なものにするためにも，基本発問をもっとしっかりと考えさせる必要があった。言い換えるなら，授業の前半部を，より児童の印象に残るようなものにする必要があった。授業の前半部が印象に残るものであったなら，児童は，価値の見方をより自分との関わりにおいて考えることができたように思われる。

二つ目は，授業の展開が抜けてしまったことである。授業の構想としては，優花は強い意志をもつことによって 2 か月，3 か月もがんばることができた，と押さえたあとに，資料の続きである「優花が 3 年生のときのなわとび大会で優勝して新記録も作った話」を読み聞かせるつもりであった。しかし，授業終了時間が迫っていた焦りから，資料の続きの話が抜けてしまった。強い意志をもって記録がのびてきた優花が，目標である「なわとび大会の二重とび競争で優勝すること」を達成できたかが分からない授業になってしまった。解説における「努力と強い意志」の目標を見てみると，自分に負けない心の育成であり，結果を出すことが大切だとは述べられてない。ただ，「目標に向かって強い意志をもって頑張った優花は，目標を達成することができた。」という優花の姿を知ることは，児童が自分も強い意志をもって努力することの意味を見いだすきっかけになっていたかもしれない。また，課題の 1 つ目で述べた，自分との関わりで考えることにもつながっていたのかもしれない。

三つ目は，児童が価値の見方の多様性について知る機会がなかったことだ。本授業実践において，児童は「強い意志をもつことが大切」という新たな価値の見方を学んだ。学んだ価値の見方を踏まえて自己を見つめ直し，それをワークシートに記述した。ただ，それは学んだ児童一人の価値の見方である。他の児童がどのように「強い意志をもつこと」について考えているのかを知らない。授業後に話している様子もなかった。つまり，新たな価値の見方を学んだにもかかわらず，その見方に広がりがなかったと考えられる。その価値の見方を広げる機会が，本来であれば，「意志」という言葉を学んだあとの展開に在った。構想の通りに，「これからの優花の姿」や「そんな優花をどう思うか。」を児童に考えさせて開き合わせることができたなら，児童は，新たな価値の見方が多様であることを対話的な学びによって知ることができたのかもしれない。また，ワークシートに記述したことを開き合わせてもよかっただろう。そのような，新たな価値の見方を学んだあとの展開を大切にしていきたい。

5　おわりに

本授業実践は，対話的な学びに焦点を当てて，児童が自己を見つめ直すことのできる道徳の授業を構想し，実践することを目的とした。この目的の下，Y 小学校 3・4 年生 8 名を対象に，内容項目「A－5　努力と強い意志」，資料「二重とびチャンピオン」の授業実践を行った。価値理解，児童理解，資料分析を通して，授業のねらいを決め，それをもとに授業構想し，実践した。

本実践研究の成果は，①ねらいの達成につながる班活動としての対話活動を設定できたこと，②児童の価値の見方の変容をみることができた点である。

課題は，①児童が自分との関わりで考えたと思われる記述があまり見られなかったこと，②授業の展開が抜けてしまったこと，③児童が価値の見方の多様性について知る機会がなかったことだ。

本授業実践によって，児童が十分に自己を見つめ直すことができたとは言い難い。その意味では，本実践研究は，まだまだ満足できるものではない。とはいえ，本実践研究を通じて，授業を丁寧に構想することの大切さを改めて学ぶことができた。授業構想の段階で，価値理解や資料分析を丁寧に行うこと，そこで得た理解や分析に基づいて授業のねらいを設定すること，そのねらいを達成するための中心発問を慎重に検討すること。こうしたことは，いわば授業づくりの基本ではある。だが，これらの基本はたしかに，新たな価値の見方を学ぶことのできる道徳授業をつくることにも，児童が自己を見つめ直すことのできる道徳授業をつくることにも，つながっている。この学びを活かして，今後も，児童が自己を見つめ直すことのできる道徳の授業づくりに励んでいきたい。

参考・引用文献

・編集委員会著「二重とびチャンピオン」『3 年生のどうとく』文溪堂

・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』

・上地完治，眞榮城善之介，稲嶺盛久，上地豪，比嘉さやか，新垣博也『子どもたちに考えさせる道徳授業づくりに関する実践的考察：資料「はしのうえのオオカミ」の教材研究を通して』琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要　第 21 号，2014 年 3 月，p.121-134

・瀬戸真（1989）「道徳教育の改善と課題」国土社，p.158-159

・文部科学省（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016 年 12 月，p225-226